

---

# 鰐ノ涙

紀乃子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鰐ノ涙

### 【Nコード】

N2026D

### 【作者名】

紀乃子

### 【あらすじ】

ずっと普遍的なものに思えた秩序が、かつての親友によって壊されてしまった博文。人の血を飲む事でしか生きられないが、未だに人としての意識が先立つために食事も摂れず、自分の存在さえも許せない。そんな彼とシモンの、過去から現在までの話。

## 第一話：電話（前書き）

B Lの一步手前の友情ぐらいが目標なので、苦手な方は辞めたほうがいいかもです。

## 第一話：電話

「……ただいま留守にしております。ピーという発信音のあと、お名前と御用件をお話し下さい。ピー……………」  
「……………」、久し振りですね。この間、君のことを見掛けました。相変わらず食事をきちんとしていないようですね。すっかり痩せて……………」君は、未だに後悔しているんですか？私を助けてくれると言ったのに、側に居てくれると言った筈なのに……………」  
「私の仕打ちに怒っているのでしょうかね……………」  
「近い内にまたお会いしましょう」  
……………」ピー、\*時\*分一件です。

マンションの一室に空しく響いた。

1DKの部屋には、独身の一人暮らしらしくテレビに炬燵がぽつんとある。

冷蔵庫はなく、キッチンも使われた感じがしない。

一人暮らしではよく見掛けるカップメンや缶ビールの姿も見えなかった。

ただ、一つ生活感が窺えるものは部屋の端に積み上げられた本だけだ。……………」どれも古く、使い込まれた教科書だが。

その時、玄関の扉が開き一人の痩せた男が入って来た。

その男は、この部屋の主で博文<sup>ひろふみ</sup>という。

博文は、二十代後半の容姿をしていた。

しかし、その顔はもっと老成したもので表情にも疲労感が浮かんでいる。

十二月だというのに、黒のカッターシャツに黒のパンツという軽装な出で立ちで、しかしそれに苦痛を感じているようではない。

彼は、光の加減によつては青くも見える程の黒髪で、しかし典型的な日本人の顔をしていながら肌の色が蒼白く、一切の黄味がかった部分が見当たらなかった。

また、そんな顔の中でも一際特徴的なのが、サングラスで隠されている片方だけの碧眼である。

博文は、留守電のボタンが点滅しているのに気が付き、メッセージを聞いた。

溜め息がひとつ。彼は、うなだれたまま暫く動くことが出来なかった。

「．．．．．疲れた。というか、痩せたって．．．．．そりゃあ痩せるだろう。ずっと食ってないし．．．．．食えないし」

博文は、サングラスで隠されている瞳をぼんやりと空中に彷徨わせた。

しかし、そこには何も見出だせなかったのか、先程よりさらに暗く陰った瞳でただ電話を見つめることしか出来なかった。

留守電で響いた声の持ち主は、かつて博文の親友だった。

親友の名前を、シモンという。

シモンを親友と呼べた期間は、十余年に及んだ。

しかし、博文はシモンの前から逃げ出したのだ。

孤独のために縋ってきた彼を。

どうしようもなく苦しみ悩みながら、拒絶することも許されず逃げ出したのだ。．．．．．ただ、それまでの自分という存在を守るために。

「逃げ出す事は出来ない。何者も、自分の影からは．．．．．俺がしていた事は、無駄な事だったのか？シモンの前から逃げて、我慢し続けても全く収まらない喉の渇き。．．．．．死にたい」

しかし、博文は死ぬ事が出来なかった。

死のうと試みた事はあったものの、どうしてもシモンとの約束が止めるのだ。

どうすれば、楽になれるのか。

博文は、ずっと考えてきた。

まだ答えは見つからない。

「シモンに会いたい．．．．．」

逃げ出したものの、楽にはならなかった。

いや、もっと酷くなったといってもいい。

孤独に怯える彼の前から逃げておいて、今さら会うなんてと何度も思い止まってはきた。

しかし、自分勝手と言われようともう我慢出来なかった。

耐えられなかった。．．．自分の存在に。

彼なら答えてくれるかもしれない。

孤独に苦しんではいたが、自分と同じ苦しみはなかったように思うから。

何でもいいから、例え納得出来ない答えであってもいいから、もう自分という存在を許したかった。

．．．自分という、人の血を飲む事でしか生きられない存在を。  
．．．彼が創り出した、こんなに忌わしく哀しい存在を。

## 第一話：電話（後書き）

初めて書いたのですが、思った以上に大変でした。……一週間に一回ぐらいを目指して頑張るので、のんびり覗いて下さい。

## 第二話・枇杷（前書き）

博文が七歳の時です。

## 第二話：枇杷

……ミーン、ミンミンミン……

暑い夏だった。樹木は青々と生い茂り、蝉が朝早くから夕方近くまで鳴いていた。

少し動くだけでも、身体中から汗が吹き出るくらいに昼の気温が高かった。

佐代子<sup>さよこ</sup>は、汗ばんだ額を手ぬぐいで拭った。

真昼に着物姿は、さすがに着慣れているとは言っても辛かった。

水色の単衣の着物は、外見上は涼やかに見えたが実際に着ると暑い。

いつそ浴衣のままでいたい気持ちがあつたが、いつ夫の来客があるかもしれないと思うと気を抜く事も出来ない。

佐代子は、盥に水を張って持ち歩き出した。

廊下が、ぎしぎしと音をたてる。

築十年になるといふ隣家から間借りさせて貰っている家だ。

佐代子の実家は、華族だった。

夫は、言語の研究をしていた学生でなんの身分も持っていなかった。

佐代子の実家は、それなりに会社の経営が成功していたので娘を箱入りに育てて、いずれは名の通った誰かに嫁がせるつもりだったらしい。

当時、佐代子の二つ上の兄の先輩で志している学問は違ったものの仲の良かった清太郎<sup>せいたろう</sup>が、よく家に立ち寄っていた。

外出する事も少なく、家の中の事が御稽古の事しか知らなかった佐代子は、清太郎に対して興味を持っていた。

兄は常々、可愛い妹が余りに外の世界を知らない事を不憫に思っていた。そこで、佐代子に清太郎を紹介する事にしたらしかった。

佐代子は、清太郎からもたらされる外の世界に魅了された。

……それと同時に、兄の様に慕っていた清太郎に淡い恋心を抱き、清太郎と心を通じ合わせていた。

それから、思いを通じ合わせた二人は夫婦になりたいと思い、両親に許してくれるようお願いした。

しかし、法律では華族と庶民の自由結婚が認められてはいたものの、反対にあつてしまったのだ。

二人は三年間辛抱してお願ひし続けたが、やはり許しては貰えなかった。

結局は、佐代子の兄の手引きで駆け落ちをした。

駆け落ちは、成功だった。

両親に悪いとは思いつつ、片田舎で細々と暮らしていた。

夫となつた清太郎は、教師として町の小学校に勤務して、生活も順調だった。

その内に、佐代子に子供が生まれ、名を博文とした。

あれから、七年。

清太郎は、苦勞がたたつたのか元からさほど丈夫ではなかった心の臓が病み、死の床に臥している。

佐代子は、清太郎の部屋の前で蹲つた博文を見た。

博文は、佐代子によく似ている。顔も、肌の白さも。ただ、清太郎の血を継いでいるのは博文の左目を見れば直ぐに分かる。

左目だけが、碧眼になっているのだ。

清太郎の家系には、これまでも何人かいたらしく珍しくもないような反応だったので、佐代子も特に気にしていない。

その博文は、佐代子の手製の短い着物に身を包んでいる。

細長い手足を身体に引きつけながら、縮こまって揺れているようだ。

足音にも気付かない。

佐代子は、声を掛けた。

「博文さん？そんな所でじっとして、どうなさったの？」

博文は、ハツとしたように我に帰ると佐代子に目を向けた。

その目は、気が弛んだように一瞬で涙の膜を張ってしまう。

そして、ギクシャクと固まった手足を動かして佐代子の前に立った。

博文は何度か口を開閉すると、ようやく言葉に出した。

「お父さんのご病状はどうなのでしょう？ゆうべ、お父さんが居なくなってしまう夢を見ました。……、お母さんはご存じなのですか？」

佐代子は、答えに詰まった。

一昨日、町医者に往診に来て貰った時にあと一週間保たないと言われたのだ。

しかし、八つになる息子に現実を突き付けることは出来なかった。

佐代子は、どうにか笑顔を作る。

「お父さんは、大丈夫ですよ。……今は臥せているけれど、元気になる筈です」

博文に虚偽を言った所で、夫の病が治ることはないとは分かっている。

しかし、もしかしたらとも思っていた。

「……、博文さん。きっと大丈夫です。清太郎さんを信じましょう。さあ、泣かないで。博文さんが泣くと、私も悲しくなります」

博文は聡い子供だ。

佐代子の話を聞いて、何かを悟ったのかただ涙を溢れさせて立っていた。

佐代子は、盥を廊下に置くと手ぬぐいを取り出して、それで博文の顔を拭ってやった。

なんとか元気づけなければ、と思った佐代子はふと思い付いて、

「……そういえば、枇杷はまだ生っているのかしら？」

と、まだ流れていた博文の涙を拭いながら佐代子は聞いてみた。枇杷は、清太郎の好物だ。

裏山にまだ生っているなら、博文の気を紛らわせる為にも取りに行かせようと思う。

しかし、普通は六月ぐらいで旬を過ぎるだろう枇杷が生っているだろうか？今は八月なのだ。

「……、分かりません」

普段は裏山を遊び場に使っている博文も、覚えていないようだった。佐代子の顔をじっと見ている。どうしよう、そう顔に書いてあった。

しかし、ふいに何か感じるところがあったのか博文は目をしっかりと見つめてきた。

「裏山にはあるかも知れないです。見てきましょう」

博文の涙は、止まっていた。

佐代子には、今からまた父の介護があると思えばこれ以上何かを言うことは出来ないし博文は考えたに違いない。

「そうね。お父さんの好物だから、有ればきつと喜ぶでしょうし。

……、お願いね」

佐代子は、少し罪悪感が湧いたがどうする事も出来ないと思い、有るかどうかも分からない枇杷を見つけるように頼んだ。

博文は、目をまんじりと見開き口を横一文字に引き結んでひとつ頷いた。

言葉はなく、そのままくると振り返り玄関の方へと走り去っていった。

佐代子は、その後ろ姿を暫くじっと見つめていたが不意に口許を引き締めると、また盥を持ち上げて清太郎の部屋へと入っていった。

## 第二話：枇杷（後書き）

固い文章になってしまいました。一話目と微妙に書き方変わってないよね？と自問自答中です。次は、シモンとの初めての出会いの予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2026d/>

---

鰐ノ涙

2011年1月15日22時25分発行